

## <図書紹介>

『対話する道徳をデザインする いちばんわかりやすい道徳の授業づくり』

荒木寿友著 明治図書 2021年

立命館大学大学院教職研究科1年次生 松坂 雛

日本各地で社会問題となったいじめを契機に、道徳は特別の教科という形で完全実施されすでに3年が経った(小学校)。年間35時間の授業が確保されているが、他の教科に比べて授業をする時間は圧倒的に少ない。「道徳の授業をする」イメージが持てず、登場人物の心情を読み取るだけの国語のような授業になってしまったという事態に陥ったことがある人もいないのではないだろうか。私自身、「道徳の授業を受けた」経験が非常に乏しく、唯一記憶に残るのは、小学校の学期末に渡される新品の「心のノート」を、その日限り書き込むといったことぐらいだ。

自分なりの道徳の授業を目指すにしても、まずは基本を押さえなくてはよりよいものにはならない。そもそも道徳とは何かといった基本も含めて、本書ではタイトル通り、非常にわかりやすく解説している。構成は全33講の2章立てとなっている。道徳教育をする上で、教師が陥りがちなことや、現代的諸課題と結びつけた道徳のあり方などを幅広くカバーしている一冊となっている。

第1章では、「特別の教科 道徳」はこれまでの道徳と何が異なるのか、目指している道徳教育とはどんなものなのかが示されている。道徳教育は学校の教育活動全体を通じて養われることを目標にしている。他教科や総合的な学習の時間及び特別活動とも密接に関連する。道徳教育の理解を曖昧にすると、関連するすべての指導も曖昧になっていく恐れがある。カリキュラムマネジメントをするうえでも非常に重要なポイントといえる。

第2章では、実際の教材や授業展開をもとに

「授業開き」「教材研究」「導入・終末(振り返り)」「教材提示」「発問」「板書・ノート・ワークシート」「ペア学習・グループ学習・ワークショップ」「ICT活用・教具」「定番教材」「さまざまな指導法」「現代的課題」「インクルーシブ教育」「評価」の13項目を解説している。道徳的諸価値観を一方的に説くのは容易だが、今求められているのは、「考え、議論する道徳」である。子どもたちが主体的に考え、対話を重ね、正しさや良さを自分自身で見出すための授業づくりが求められている。

私は特に教科書以外の「素材」を「教材」として扱う「教材研究」が参考になった。現代社会は情報に溢れており、子どもたちと共有したい話はたくさんあるからこそ、注意が必要であると指摘している。説教臭く、また子どもたちに単一的価値観を押し付けたくないよう、自我関与を意識した発問をし、多様性や当事者意識を養える授業づくりを目指したい。

本書は道徳の授業に限らず、他教科にも通じる授業づくりのヒントが詰まっている。常に「基本」に戻れるおすすめの一冊である。

